常識を疑い、覆し、新しい未来を創造する。若者がありたい”横浜の未来”を問う「ヨコハマ未来創造会議」プレミーティングレポート

横浜市は、GREEN×EXPO 2027（２０２７年国際園芸博覧会）の開催を契機に、20 年・30 年先の社会を担う現在の大学生や企業の若手社員の若者が参加、議論し、アクションを起こすきっかけとなるプラットフォームとして「ヨコハマ未来創造会議」（仮称）を新たに立ち上げ、2023年12月10日（日）にパシフィコ横浜にてキックオフイベントを開催しました。

キックオフイベントのレポートはこちら
https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/seisaku/torikumi/engeihaku/yokohama_new_gen.files/0007_20240215.pdf

本レポートでは、キックオフイベントに参加した約40名の若者が再び集い、2024年3月8日（金）に象の鼻テラスにて開催された「ヨコハマ未来創造会議」プレミーティングの様子をお届けします。

イベント当日に集まった「ヨコハマ未来創造会議」プレメンバー及び事務局メンバーの集合写真

横浜港・赤レンガ倉庫からすぐに位置する「象の鼻テラス」にて行われた今回のプレミーティング。令和６年度（2024年4月以降）の「ヨコハマ未来創造会議」本格始動に向けて、横

浜に縁ある若者たちが横浜で取り組みたい活動のアイデアを発散する機会として開催しました。

オープニングでは、今回のプレミーティングのテーマ「ヨコハマで咲かせたい100の夢 未来の種」について説明。司会進行を務めた株式会社ロフトワークの加藤 翼さんは前回行われたキックオフイベントを振り返った上で、「横浜の未来について、今はまだ誰も正解を持っていません。今回を機に皆さんと一緒に考えていきたいです」と話し、改めて「ヨコハマ未来創造会議」のメンバーが中心となって横浜の未来を対話・試行し、形づくっていく姿勢を示しました。

また横浜市都市整備局国際園芸博覧会推進課 岩下係長は、「ヨコハマ未来創造会議」のような会議体が横浜市にとって新しい取り組みであることを明かした上で「どうすればこの場を有意義にできるのか、まだ模索している段階です。皆さんの意思やアクションが社会を動かせることを体現する会議体として、一緒に作り上げていきたいと思っています」と挨拶。そして、「ヨコハマ未来創造会議」の活動成果を、しっかりと形にしていきたいと意気込みました。

当日はキックオフイベントに参加したメンバーに加えて、「ヨコハマ未来創造会議」の活動に共感した横浜市役所の若手職員も参加

まずは仲間づくりから。「ともに考えたい」という思いから生まれた8つのテーマとは

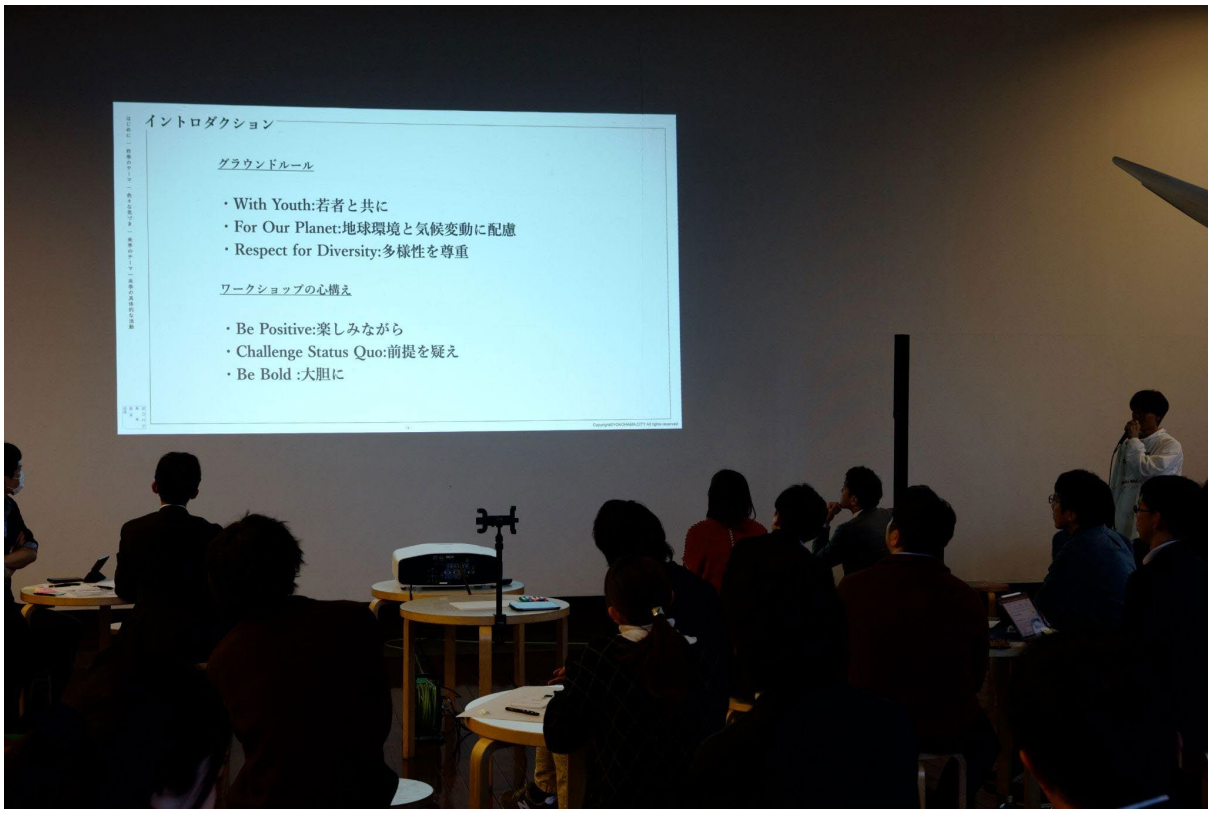
オープニングが終わると今日のディスカッションをともに行う仲間を探す「チームアップ」のワークがスタート。互いを知るアイスブレイク後、横浜やGX（グリーントランスフォーメーション）について考えたいテーマを共有しました。テーマについては、プレミーティング開催前に実施されたオンラインセッションの参加者を中心にテーマが持ち込まれ、8つのチームが生まれ、ともに考えたいメンバーが集まりました。

アイスブレイクとして行われた「人探しビンゴ」では、ビンゴ用紙に書かれた「特徴」に該当する人を互いに参加者から見つけ出しました

- チームA「みなとみらい以外の横浜の魅力とは」
- チームB「横浜の自然・農業の未来」
- チームC「横浜らしいグルメ土産の未来」
- チームD「横浜とテクノロジーとGX」
- チームE「コーヒーが不味くならないストロー」
- チームF「横浜ならではのスマートシティ構想」
- チームG「横浜が魅せるGXとは」
- チームH「GXで音楽と映画の未来を変えるには」

チームができると、続けて司会の加藤さんより今日のワークの流れについて説明されました。今日は定説を疑い、未来の常識を妄想する「Questioning」1人から夢を描き
他者と共有していく「Dreaming」、共有したい夢を手触りのある形に変えていく「Prototyping」3つのステップで夢を描き、未来を創るワークを進めていきます。特に重要となるのが「常識に立ち戻り、それを意図的に覆すこと」と加藤さんは説明します。民間企業としてロケットの打ち上げを行うSpaceX社の例を用いて、あたりまえを疑うことの重要性を伝えました。

「それまでは『ロケットは1度きりしか使えない』ことが常識でしたが、SpaceXはロケットの機体の再利用を実現したことで、毎週のようにロケットの打ち上げを行い、宇宙ビジネスにおいて快進撃を進めています。僕らは一定の常識を持って未来を考える節がありますが、革新的なアイディアは常識を壊すことから生まれるのです」



ワークに先立って「ヨコハマ未来創造会議」のグラウンドルール、ワークショップの心構えも共有されました

STEP 1 横浜らしさとは？自分の中に潜む”思い込み”を書き出す

説明が終わると、いよいよワークがスタート。そもそも常識を壊すためには、自分の中に潜む常識を自覚する必要があります。そこでワークのはじめとして、テーマに関連するそれぞれの思い込みを自由に議論しました。

例えば「横浜らしいグルメ土産の未来を考える」をテーマに掲げたチームでは「横浜らしいグルメ土産」から、そもそも「横浜らしさ」とは何かについて頭を悩ませながらも考えていました。テーマについて考えるうちにだんだんと熱がこもり、立ち上がって議論するチームも。およそ15分間のブレストで、それぞれのテーブルに多種多様な常識が広がりました。

はまっこが集まったチームでは、横浜あるあるで盛り上がる場面も見受けられました。「これ、そのまま常識になりますよね！」と思わぬ発見も生まれていたようです。

「思っていたよりも全然出てこない」「そもそもGXってどういう意味でしたっけ？」等、悩みながらもそれぞれの思い込みがポストイットに書き出されていきます

STEP 2「あたりまえ」を「もしも」に置き換えて、問いを生み出す

続いては前提を疑う、Questioning（クエスチョニング）。「もしもこの常識が、〇〇〇だったら？」というように、STEP 1で出されたような常識が存在しない世界や常識が全く違うものにすり替わった世界などを思い描き、逆説を導き出します。

「もしも」の世界を考えることは普段の思考とは異なり、決して簡単なことではありません。最初はなかなか進んでいなかったチームも後半になるにつれて「こんな世界も面白いかも！」と議論が盛り上がっていきました。

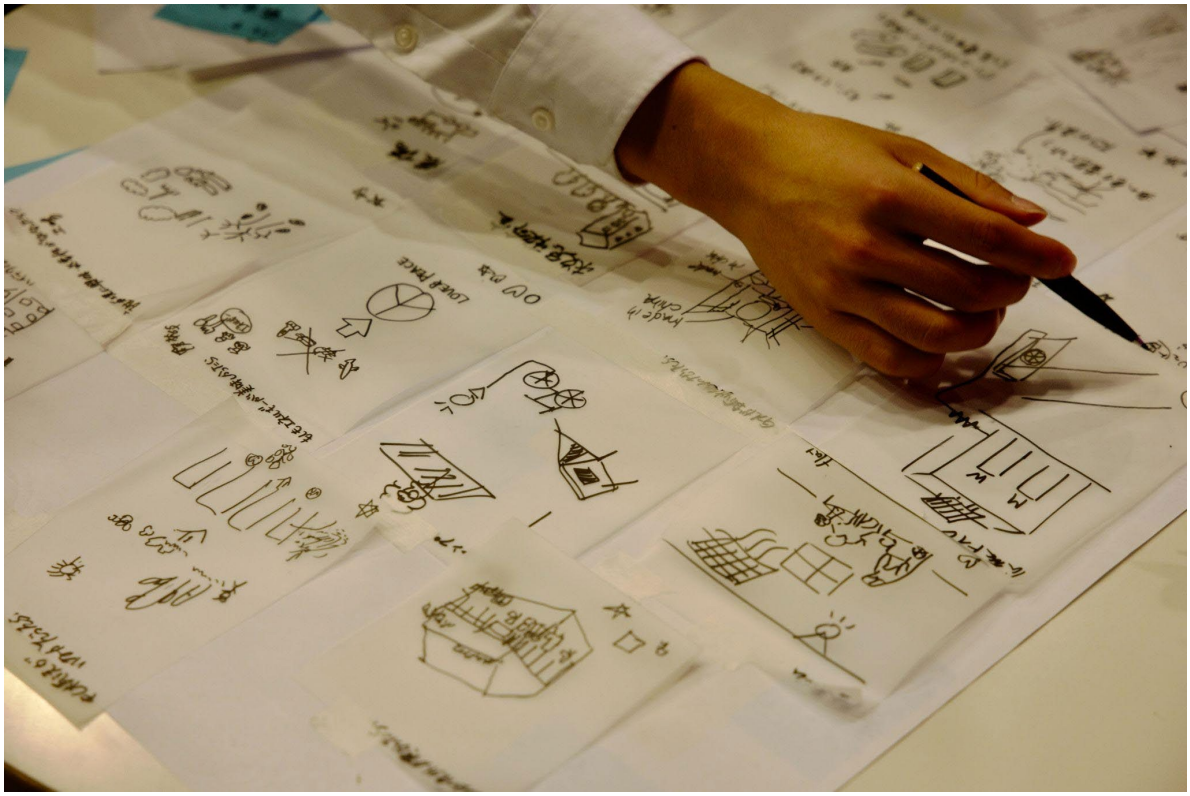
チームで出された常識から逆説を考え出すことにチャレンジするメンバーたち

STEP 3 未来の種をアイディエーション

いよいよワークも後半戦。STEP 2で書き出した「もしもの世界」ではどのような光景が広がるのかを考え、まずはイラストとして描き起こします。参加者は用意されていた「シチュエーションカード」と生み出されたアイデアを組み合わせ、逆説が実現した未来を想像しました。

シチュエーションカードには「家庭菜園」「公園」などさまざまな場所とイラストが描かれており、メンバーはこれらを参考にシーンを描き出します

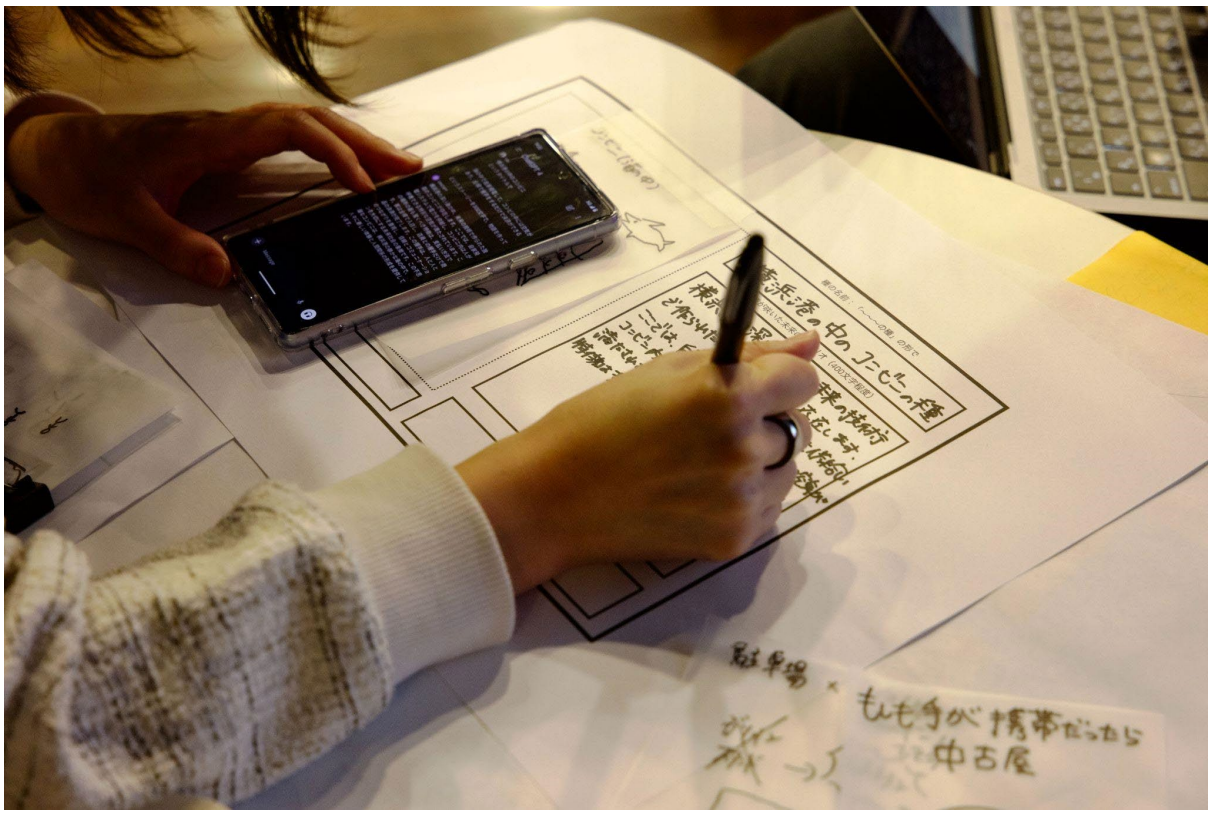
「もしも横浜に海がなかったら、山ではどんなことが起きる？」「もしも化石燃料が無限に存在したら、家庭菜園はどうなる？」などそれぞれが選んだお題に沿う形で自由にイメージします。メンバーたちは「なんでもありだからこそ、逆に分からなくなってきました！」「技術の進歩が必要だけど、こんな未来もあり得ますよね」と思考を巡らせ、アイデアを発散していきました。



あっという間に逆説からたくさんの実現したい未来が生まれていました

最後にこうして集まったアイデアの中から各チーム「横浜の未来にインパクトを与えそうなもの」を一つ選び、「横浜で咲かせたい未来の種」としてまとめました。さらに、その「未来の種」が発芽する（＝未来が実現する）条件として必要な技術やお金、法律などを書き出します。また、実現した未来をシェアするために、状況を説明するシナリオとビジュアルを作成。画像生成AIやChatGPTなども活用しながら、イメージを固めていきます。

自分たちの思い描く未来がAI画像によって具現化されると完成度に驚くメンバーたち



ChatGPTを活用して「横浜で咲かせたい未来の種」の発芽条件を考えるメンバーも

参加者投票によって最も評価された”未来の種”とは

ワークショップのまとめとして、ここまで約2時間の議論を経て各チームによって作り上げられた「横浜で咲かせたい未来の種」が発表されました。また、今回は参加者の投票によってMVS（Most Valuable Seeds）を選出します。「横浜の自然・農業の未来」をテーマに掲げたチームでは、「空港」というシチュエーションカードと組み合わせて、「もしも横浜空港があったら」という逆説の下、空港のすぐそばに緑が広がっているような未来の空間をプレゼンテーションしました。

全てのチームの発表が終わるといよいよ投票に移ります。どのアイデアもユニークでしたが、その中でも参加者から最も価値あるものとして選ばれたのは……。

チームで考えた“未来の種”を代表者が発表しました

MVS（Most Valuable Seeds）に選ばれたのは、チームDの「横浜港の中のコンビニの種」。そのアイデアは、自家発電システムで電力を供給するコンビニを横浜港の海中につくり、決済は「握手で完結する」というもの。港町である横浜らしさを活かしたGXと、テクノロジーを融合させたユニークなアイデアに最も票が集まりました。

MVSに選ばれたチームDの発表資料

MVSを受賞したメンバーは「突拍子もないアイデアを皆さんが受け入れてくれたおかげです」と喜びました。続けて「さまざまなアイデアがあり、どのように描き出すかすごく悩みましたが、最終的にユニークなアイデアにまとまって良かったです。「握手で完結する」という決済方法は、単純な面白さからアイデアに組み込んでいたのですが、シナリオにまとめたときにChatGPTが『握手で決済することは人間らしさとテクノロジーの融合』と言っていて、なんだかハッとさせられたんです』とコメントしました。

当日発表されたアイデアはグラフィックレコーディングで記録しました

あの時、横浜から。令和６年からいよいよ本格稼働

約3時間のワークショップが盛況のうちに無事終了。横浜市都市整備局国際園芸博覧会推進課 河野課長はイベントを振り返って、「人は将来のことを考えていると悲観的になることもありますが、今日の皆さんの様子を見ていて、やはり未来をイメージするのは楽しいことなのではないかと感じました」とコメントしました。

常識を疑い、覆し、新しい未来を創造する。三段階の思考ステップを経て、プレメンバーたちは横浜で実現できる未来の可能性が無限に広がっていることを感じるとともに、改めて自分たちが起こすべきアクションについて考えたことでしょう。

イベント終了後もプレメンバーの熱は冷めやらず、あちこちで議論の延長や交流を深める時間が続きました

「ヨコハマ未来創造会議」が目指すのは、ここで生まれたアイデアを社会実装に繋げるムーブメントを生み出していくこと。GREEN×EXPO 2027（２０２７年国際園芸博覧会）まであと3年。この日生まれた”未来の種”はどのように芽吹き、花を咲かせるのでしょうか。

「ヨコハマ未来創造会議」のイベント・活動については公式SNS等で随時更新していきます。フォローの上、続報をお待ちください！

X(旧Twitter)：https://twitter.com/yokohamanextgen
Instagram：https://www.instagram.com/yokohama_next_gen